

千里から ニュータウンを 考える

「当事者の時代」における
計画された町の成熟に向けて

すずき
鈴木 育

近畿大学教授
千里ニュータウン研究・情報センター共同代表

千里ニュータウンの大きな本。「おおさかカンヴァス 2012」中之島公園での展示





幾何学型車止めが4つ並ぶ名所。▽はこの先
が下りということを示す



動物型車止め。歩行者専用路の両端で車の進
入を防ぐキリン。小さい傾滑り台として遊んだ
思い出のある人も多い

千里ニュータウンの近隣住区のひとつである豊中市新千里北町には、キリンやアシカなどの動物タイプ、三角や四角や丸型の穴の空いた幾何学タイプなど、通常のものとは違うユニークな車止めが数多く設置されている。歩行者専用道の出入り口の真ん中に置かれた彼らの様子は不思議かつユーモラスで印象的だ。特に動物タイプは歩いていて出会うと「置かれた」というよう、「そこに居る」といいたくなる存在感があり、実際「家の近くにはカバが居ました」とあたかも生きた動物であるかのように話してくれる住民もいる。

私もメンバーである「千里ニュータウン研究・情報センター」(通称ディスカバー千里)では、千里の町の成り立ちや生活の歴史を調べるなかで、北町に独特の車止めが沢山あることは以前から話題になっていたが、どのように配置されているのか、なぜ北町だけに多いのかは謎に包まれていた。

昨年近畿大学建築学部建築計画室ゼミとディスカバー千里メンバーで町歩きをしている時、この車止めの配置にはルールがあるのではないかと学生が気づき、共同で調査したところ、北町

新千里北町の「車止め」の謎

千里ニュータウンの近隣住区のひとつである豊中市新千里北町には、キリンやアシカなどの動物タイプ、三角や四角や丸型の穴の空いた幾何学タイプなど、通常のものとは違うユニークな車止めが数多く設置されている。

歩行者専用道の出入り口の真ん中に置かれた彼らの様子は不思議かつユーモラスで印象的だ。特に動物タイプは歩いていて出会うと「置かれた」というよ

り、「そこに居る」といいたくなる存在感があり、実際「家の近くにはカバが居ました」とあたかも生きた動物であるかのように話してくれる住民もいる。

私もメンバーである「千里ニュータウン研究・情報センター」(通称ディスカバー千里)では、千里の町の成り立ちや生活の歴史を調べるなかで、北町に独特の車止めが沢山あることは以前から話題になっていたが、どのように配置されているのか、なぜ北町だけに多いのかは謎に包まれていた。

この研究を通じて感じたのは次のようなことである。

- ・あらためて千里ニュータウンは、全体計画、住区、住宅地、施設計画はもちろん、現場で検討されたであろう細かな道路上のエレメントの選択から配置まで、丁寧に工夫されてつくられた町であること。

全体で一三種類五二基(動物型九種二四基、幾何学型四種二八基)の車止めがあること。動物型は町をめぐる主要な歩行者専用道路や公園のそばにされること。幾何学型は戸建て住宅地には階段や下り坂があること、などが明らかなことだ。そして、一九六二年まち

びらきの佐竹台住区から、ほぼ時計の反対回りの順に開発された千里ニュータウンにおいて、歩行者道路システムが変わる節目となつた新千里北町の計画の試行錯誤のなかで、通常は公園遊具(ブレイ・スカルプチャ)として使用されるオブジェの車止めと配置が意図されたのだろうという結論となつた(その後、大阪府企業局で千里の建設に携わられた片寄俊秀先生から新情報とアドバイスをいただきて研究を続中である)。

しばしば均質で個性がないといわれがちなニュータウンであるが、町ごとに個性があること（北町の住民は千里の他の町にもこのような車止めがあるのだと思つていた）

・北町の車止めや道には住民の思い出が積み重なつてること（上に乗つて遊ぶのはもちろん、親はぐずる子どもに「羊さんのところまで頑張ろう」「三角までいつたら抱っこ」とあやしたという。また「家庭訪問の目印にしています」という小学校の先生もいる）

一方で、千里の町がどのような理念のもと、どういう意図で計画されつづかれているのかは、あまり市民に共有されていないこと（子どもや最近引っ越してきた住民はもちろん、長く住んでいる大人たちも、残念なことにしばしば専門家や町を管理する自治体職員も…。）立派な報告書『千里ニュータウンの建設』、開発記録映画「ひらけゆく千里丘陵」など計画や建設のオフィシャルな記録が充実している千里であるが、まだまだ知られない計画・デザインの工夫があること。

ニュータウンにも歴史がある

一九九七年に大阪大学に勤務することになって以来、キャンパスのお隣であるこの千里ニュータウンとのお付き合いが始まった。コミュニティ・カフェの先駆である「ひがしまち街角広場」（豊中市新千里東町近隣センター内）で住民の方々とお話しするなかで、また二〇〇六年に吹田市立博物館で開催された「千里ニュータウン展」で展示のお手伝いをした折に、千里のパイオニア住民ともいえる佐竹台住区の皆さんから色々教えていただきながら、近隣住区理論に基づいて計画された日本初の大規模ニュータウンとして教科書的には知つていたこの町の歩みについて多くを学ばせてもらつた。

まず思い知ったのは、ニュータウンにも歴史があることである。当たり前のことだが、歴史は民家集落や赤レンガの建物だけにあるのではない。このモダンな町にも、まちびらきから今日まで五〇年余りの間にさまざまな出来事と環境の変化、思い出があつた。

千里ニュータウンを計画建設したのは大阪府であるが、その後、自治会をつくり、さまざまな行事やイベントを始め、行政と交渉して足りない施設を

いにしえ街歩きツアー（新千里東町）。昔の中庭の写真（次頁）やその後の変化をまとめた「東町の大きな本」を使い、囲み型府宮団地の歴史を現地で子どもたちに伝える





囲み型配置の府営東丘住宅中庭の建設当初の風景。駐車場も一部屋増築もまだない。この中庭で子どもたちは安全に遊び、大人達はバレーボールやソフトボールに興じた 提供：石丸誠子



吹田市立博物館で2006年に開催された「千里ニュータウン展」で、囲み型府営東丘住宅の模型を見る子どもたち。2006年



実現し、環境を整えてきたのは住民たちに他ならない。また、町ごとに個性があることも教えられた。平等に計画されたはずの二つの近隣住区は、豊中市・吹田市のしくみの違いや、さまざまな事情経緯から、各々異なる地域社会に育っていたのである。建築計画の専門

家からみて、こうした「計画された町のその後」、計画や建設の記録には載っていない生活の変遷は非常に興味深く、研究室の学生たちと、団地や地域の住まわれた歴史、生きられた千里についてさまざまな調査研究を行ってきた。

たとえば、千里には独特の囲み型配置の府営住宅がある。通常団地は平等に日照を得られるよう、住棟を東西の平行配置にするのが一般的だが、大阪府は新しい町には住民のための広場的

スペースが必要であると考えたのである。一種の街区型とみなせるこの形式が、一九二六年以降順次竣工の同潤会アパートはともかく、一九九五年入居開始の幕張ベイタウンよりも、一九九〇年第一期工事完成の熊本の保田窪団地よりも以前に存在していたことは建築専門家の間でもあまり知られていない（あるいは忘れられている）。

新千里東町住宅での調査によれば、

た（東町のバレーは強く、全国大会出

場の写真も見せていただいた）。しか

しそ後の「駐車場化」（当初は個人

が普通に車を所有することを想定して

なかつたのである）や、お風呂と和室

増築によって、徐々に変質していく

ことが明らかになった。なお増築に

なかつたのである）や、お風呂と和室

にも階段への所属が明示されていることになる。おそらくこのことも社会集団としての階段のまとまりに影響していたのだろう。

四角い箱がならぶ均質な住まいの典型とみなされ、バリアフリー的にも課題ありとされる団地の階段室型住棟であるが、「うちの路地」ならぬ「うちの階段」といういいかたが象徴するよう、いわば路地の長屋を垂直にしたようなヒューマンな小社会だったのである。近年の建て替えによって、階段室の仲間がバラバラになってしまい寂しいという話をしばしば耳にするのはまことに残念なことである。エレベーターこそ設置されたが、ひとつのフロアに数十世帯が長い廊下に水平にならぶ廊下型高層集合住宅の形式は、新たな付き合いやご近所集団を生み出すには大きすぎるのだ。

千里が生み出した 新しい地域の場

自治会活動から地域環境の保全、関係者全員が参加するラウンドテーブルという手法を確立した佐竹台の団地建替え事業から、近年イベントを積極的に企画している千里市民フォーラム

まで、千里の住民活動は長い歴史があるが、特に注目したいのは、「ひがしまち街角広場」から始まつた新しい地域の場、まちの居場所づくりである。「街角広場」は新千里東町を対象とした国土交通省の「歩いて暮らせる街づくり構想」モデル事業の社会的実験のひとつとして、近隣センターの空き店舗を利用して二〇〇一年に誕生し、その後、住民ボランティアによる自主運営によって今日まで続いているコミュニティ・カフェである。初めて訪問した時には、ああ、地域にはこういう場所が必要だつたのかと目から鱗（うろこ）、建築計画の専門家として深く反省し、その後も訪問するたびに、地域の居場所の役割、運営の仕方、そして千里の歴史と、学ぶことばかりの特別な場所である。

基本的には街角広場はお気持ち料一〇〇円でコーヒーやお茶を提供するカフェ（誰かのお土産のお菓子が提供されることも多い）であるが、カフェと呼ぶいい方では到底カバーできない多様な役割を担つてきた。看板に「地域の交流スポット」と書かれているとおり、日々の挨拶・近況・情報交換、万博の頃の昔話から現在の再開発・街づくりの話題まで、実際に幅広いジャンルの会話が交わされる。高齢者の利用が

多いが、小学校の校長先生公認で寄り道できるので、小学生が水や氷をもらってくる。その際、挨拶がなければ叱られる事になる。親と先生以外の人との接触は子どもにとって貴重な経験である。誰々さん最近みないねと気

づけば、じゃあみてくるよと。ブレ福祉施設的な役割ももつ。家族の病気についてのやりとりを聞いていると、ネット検索から得た知識と、身近な知人から聞かれる体験情報とは説得力が違うことを思い知らされる。これまでの



ひがしまち街角広場 3周年。毎年秋、街角広場を利用してくださる地域の方々への感謝をこめて、おでん、ビールなどを振る舞う。現在進行中の近隣センター建て替えプランではこうしたイベントのためのスペースは計画されておらず、このような行事は開催できなくなる。2004年 撮影：尹俊到

建築計画や地域計画は、こうした顔のみえる関係での会話や情報のやりとりの価値を軽くみすぎてきたのだとつくづく思う。

街角広場では飲み物を注文する必要はなく、日に何度もふらつと来られる方も多い。この「ふらつと」が重要なのだ。計画的につくられたニュータウンの地域施設は、会議として、あるいは特定の趣味の活動の場として、あらかじめ活動内容を決め、予約して使用する場所ばかりで、ふらつと来られる場所は皆無である。ふらつと来て話しているうちに何かやろうということになつた事例を何度も目撃した。かしこ

建築計画や地域計画は、こうした顔のみえる関係での会話や情報のやりとりの価値を軽くみすぎてきたのだとつくづく思う。

街角広場では飲み物を注文する必要はなく、日に何度もふらつと来られる方も多い。この「ふらつと」が重要なのだ。計画的につくられたニュータウンの地域施設は、会議として、あるいは特定の趣味の活動の場として、あらかじめ活動内容を決め、予約して使用する場所ばかりで、ふらつと来られる場所は皆無である。ふらつと来て話しているうちに何かやろうということになつた事例を何度も目撃した。かしこ

まつた会議では決まりにくいことがここで幾つも生まれたのだ。

その一番わかりやすい例は、街角広場から誕生した地域活動団体である。小学校のPTAの父親たちのグループでさまざまな地域イベントを主催する「東丘ダーディーズ」、吹田と豊中にまたがる千里ニュータウンの竹林を管理し、竹細工や竹酢液もつくる「千里竹の会」はその代表例である。我々「ディスカバーリー千里」も、もともとは街角広場での雑談のなかから絵葉書など千里のお土産をつくろうと立ち上げた「千里グッズの会」が前身である。街角広場は新しい地域活動主体を生み出す軸

まつた会議では決まりにくいことがここで幾つも生まれたのだ。

その一番わかりやすい例は、街角広場から誕生した地域活動団体である。小学校のPTAの父親たちのグループでさまざまな地域イベントを主催する「東丘ダーディーズ」、吹田と豊中にまたがる千里ニュータウンの竹林を管理し、竹細工や竹酢液もつくる「千里竹の会」はその代表例である。我々「ディ

「当事者の時代」における 計画された町の成熟に向けて

この一〇年余りの間に千里ニュータウンの風景は大きく変わった。短期間にこれほど変化した住宅地はそうそうない。かつての住民が再訪したら「ここはどこ」と驚くのではないか。いうまでもなく府営、公社などの中層団地か



吹田市佐竹台近隣センターのアカデミー書房内にある「さたけん家」の二階。日替わりシェフがつくるランチやデザートが人気。子連れの母親グループも集まることのできる店として貴重。子どもの学習支援など幅広い地域活動が行われている。2017年 撮影：編集部



北町グループインタビュー。畠のある交流サロン（北丘小学校コミュニティ・ルーム）にて、千里ニュータウンや新千里北町についてまとめた大きな本をしながら北町の思い出を語っていただ

卵器的役割を果たしたのである。

街角広場に刺激され、その後、千里

にはこうした地域の場が幾つも生まれた。建て替えられた府営住宅の一角に生まれた「佐竹台サロン」（二〇〇九）、豊中市千里文化センター市民実行委員会

が運営する「コラボカフェ」（二〇一〇）、佐竹台近隣センターの「アカデミー書房」（千里で最初の書店である）内に生まれた「さたけん家」（二〇一一）など

など。特に「さたけん家」は、飲み物だけでなく主婦による五〇〇円の日替わりランチの提供（ささやかだが主婦が働く場である）、バッグなど手作り品の販売、子どもの学習支援活動（高校生が小学生を、大学生が中高生を教える）から高齢者の絵手紙教室、自主的読書会など、現在千里でもつともア

クティブな地域の拠点である。

まつた会議では決まりにくいことがこ

れで新しくできる住宅を購入していく人がいるから事業が成立するのである。環境とアクセスのよい千里は住むこと示している。団地建て替えに多大な費用がかかる。建て替えに

て建て替えが成立するということ自体

は、千里が成功したニュータウンであ

ることを示している。団地建て替えに記憶が埋め込まれた日々の生活の手がありである。特に長く住む高齢者が、「ここはどこ」と自分の町と思えなくなっているのではないかと心配である。

ら高層のマンションへの建て替えによる風景の変貌である。風景は生きてきた

記憶が埋め込まれた日々の生活の手がありである。特に長く住む高齢者が、「ここはどこ」と自分の町と思えなくなつて



家にさえ共有されていない。全国で千里にしかない特徴的な府営住宅の囲み型配置は建て替えの際に全く考慮された形跡がない。村野藤吉設計の南地区センターも、横文彦設計の千里中央センターも、横文彦設計の千里中央センターになつた。近隣住区や近隣センターの意味も忘れられている。冒頭で触れた、無名の設計者が工夫した北町の車止めが住民から愛され残つてゐるのは皮肉なことである（撤去されたものが希望で復活された）。

最近は歴史ある建築、あるいは使つてない空き家をリノベーションして再生し、歴史を生かした町のシンボルとすることは普通の手法になつてきたが、千里には竹原義一氏による府営住宅の先駆的仕事と、最近のUR独自の、また無印と組んだ団地くらいしか例がない。今時まとめなりノベーションがひとつもないのは残念を通り越して情けない（千里に少し遅れて開発された泉北ニュータウンでは、泉北ほつとけないネットワークプロジェクトによつて、高齢者対象など様々なりノベーションが実現されてる）。

デコモモ (DOCOMOMO=Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods

of the Modern Movement) 「モダン・マーブメントにかかる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織」という活動があり、実は千里ニュータウンは光栄にもモダニズムの住宅地として価値を認められ、日本におけるDOCOMOMO100選に選ばれているのだが、そろそろ返上したほうがいいかもしれない。

次に控える課題は、今後の社会に向けての町の更新が進んでいない」とである。確かに建て替えは盛んであるが、新しくできるのは住機能だけのマンションばかりである（十地区センターの商業施設）。千里は実験都市として、近隣住区内の医者村、地区センターのレジャー施設など多様な施設の試みがあつたが、千里中央の映画館や複数あつたホールがほぼなくなつてしまふなど、施設の種類は確実に減つている。千里の立地や環境を評価してマンションを買って住み始めたが、最近当たり前のサービスや施設が近所になく、意外に不便だなど感じている人は多いのではないか。

冷静に考えればすぐわかる」とあるが、千里が建設された当時の理想の住宅地と現在のそれとはかなり違つてきている。何よりも夫婦ともに働くの

が普通になった。旦那が梅田で働き、主婦が家を守つた時代ではないのである。小さな子どもがいる家庭の苦労は並大抵ではない。子どもを預けられる施設、フルタイムでなくてもいいので近くて働ける場（シェアオフィスなど）などが必要だろう。さらに今はネットで仕事ができる時代である。広い意味での職住近接を再検討する時期にきてる。官民でつくつた千里ニュータウン再生指針ではさまざま提言がされているが（註2）、余り実現していない。今後の日本の人口減や経済状況を考えると、建て替えは今回が最後になる可能性も十分あると思う。この機会にマンションの低層階に、あるいは近隣センターの建て替えに際して、現在と未来の居住者の生活をサポートする新たなサービスや店を入れることをなぜ検討できないのだろう。

なお、建て替え後のマンションを調査したところでは、意外にもさまざまなサークルやハロウィン等各種イベントなどコミュニティ活動はかなり盛んであつた。以前のマンションは近所づきあいをしたくない人が選ぶ住居形式であつたように思うが、最近は震災で地域社会の価値が確認されたためか、社会の変化が原因なのか、マンション

今はなき千里中央センタービル（設計：横文彦／横総合計画事務所）。千里の開発・管理を担った千里センターも入っていた千里中央の公共建築。ニュータウンに関する展示スペース、豊中市の出張所や結婚式場もあった。2006年に解体され、跡地はタワーマンションになっている。家のベランダからこのビルの時計を見て時間を判断したと懐かしむ人も多い 撮影：田中康裕



内でもある程度の交流が求められているのである。外観の佇まいはセキュリティの配慮から、かなり閉鎖的で、いわば島宇宙が林立するイメージになつてゐるが、今後、さまざまな手法を用いて地域内で連携していくとよい（この点からもマンションに集会室以外の施設を導入することを考えてもよいのではないか）。

三つ目の課題は、町のプレイヤーが圧倒的に少ないとことである。プレイヤーとは何か？ その町で本気で何かやろうとする個人やグループである。

ヤーとは何か？ その町で本気で何かやろうとする個人やグループである。一番わかりやすい例は商店である。たとえば新千里西町の笛部書店は絵本の



府営新千里東住宅（豊中市新千里東町）の建て替え状況、今から5年前、駐車場と一部屋増築後の中庭の様子。後方に見えるのは建て替えで生まれた高層の府営住宅。全国でも珍しい、この囲み型中庭の団地風景は、もうすぐ完全に姿を消す。2012年

読み聞かせなど各種地域活動を積極的に仕掛けるプレイヤーだが、こうした元気なお店は千里にはあまり多くない（しゃれたレストランなどが多くの北摂地域の中では千里は空白地帯である）。また「千里ニュータウンに住み始めた時からこういう場所が欲しかった」と考え、街角広場の方針を決めた元代表の赤井直さんはプレイヤーである。最近元気な町や地域をみてつくづく思うのは、あるテーマについて真剣に考え、アイデアと戦略をもつた当事者が確実に町を変えつつあるということだ。大阪でいえば中崎町や空堀、全国でいえば、徳島の神山町、リノベーションスクールで有名な北九州、社会福祉法人佛子園が運営する西圓寺やシェア金沢、オガールプロジェクトの岩手紫波町、全て公ではなく民間の団体がイニシアティブをもつて活動し実績を生み出している。しかし千里にはこうしたプレイヤーは少ない。原因のひとつはプレイヤーを生息させ育てる役割を担っている。空堀や中崎町では、空き家がプレイヤーを生息させ育てる役割を担っている。千里にも空き家・空きスペースは結構あるが、めつたに貸してくれない。何かを始めようと思つた時に安い費用で試せる場所が

千里は大阪府企業局が中心になつて計画的につくられた町である。大阪府は役割が終わつたとして、吹田市・豊中市と住民・市民団体に引き継いだつもりのようだが、この引き継ぎは必ずしもうまくいっていないようみえ。その理由のひとつは、計画的につくられているがゆえに、さまざまな自由な試行錯誤ができるようにつくられる。その理由のひとつは、計画的につくられているがゆえに、さまざまなものによって、さまざまな自由な試行錯誤ができるようにつくられる。その理由のひとつは、計画的につくられているがゆえに、さまざまなものによって、さまざまな自由な試行錯誤ができるようにつくられる。その理由のひとつは、計画的につくられているがゆえに、さまざまなものによって、さまざまな自由な試行錯誤ができるようにつくられる。その理由のひとつは、計画的につくられているがゆえに、さまざまなものによって、さまざまな自由な試行錯誤ができるようにつくられる。その理由のひとつは、計画的につくられているがゆえに、さまざまなものによって、さまざまな自由な試行錯誤ができるようにつくられる。その理由のひとつは、計画的につくられているがゆえに、さまざまの

千里は豊かな空間・社会・歴史資産をもつニュータウンである。新しいモ



グリーンベルトミュージアムでのパフォーマンス。ニューディール政策の一環としてワシントンD.C.郊外に生まれた住宅地Greenbeltでは住宅がミュージアムとして保存されている。75周年を迎えた2012年には様々な記念行事が行われたが、ミュージアムでも、最初の入居者たちへのインタビューに基づいて、当時の生活を再現するダンスパフォーマンスが演じられた。アメリカ グリーンベルト、2012年

歴史にアクセスできる拠点が欲しいものである。なお千里の真ん中には千里ニュータウンの開発に土地を提供した上新田地区があり、江戸時代の新田集落

タウンでは歴史や生活を振り返ることのできるミュージアムで生活史がアイデア化されている例が普通である。当初の住宅が残されており、生活を追体験できるものも多い。日本の代表である千里も、南千里の千里ニュータウン情報館に満足せず、千里の住まわれた歴史にアクセスできる拠点が欲しいものである。

千里ニュータウン研究・情報センター（ディスカバー千里）。日本で最初の大規模ニュータウンである千里を拠点とし、ニュータウンの歴史と価値を発見するために、調査・研究、アイデア、提案・デザイン、情報発信などの活動を行う。千里ニュータウンに関する各種メディア（絵葉書、パンフレット、大きな本）の制作や、まち歩きガイドツアーも実施する。

<http://semrinewtown.xsrv.jp>

注2 二〇〇七年公表。「住民が生活していることを重視」「将来、住民となる次世代のことを重視」「グレーター千里の中心として、新しいものを生み出す先導性を重視」「コミュニケーションと再生のプロセスを重視」という四つの理

ダムな町に少し戸惑いながらも期待して生活してきた五〇年余りの歴史は、戦後、全国の住宅地で展開された国民的記憶の代表でもある。欧米のニュータウンでは歴史や生活を振り返ることのできるミュージアムで生活史がアイデア化されている例が普通である。当

か）。住まわれた記憶をあらためて味わいつつ、二〇世紀のモダンな住宅地を次世代に引き継ぎ発展させるために衆知を集める時期に来ている。

以来の町並・屋敷がかろうじて残つている。これもまた大きなボテンシャルを秘めたエリアであり、これらも含め、千里地区全体をエコミュージアム的に整備する仕掛けもありうると思う（ぜひ民博にも協力いただけないだろうか）。

千里ニュータウン研究・情報センター（ディスカバー千里）。日本で最初の大規模ニュータウンである千里を拠点とし、ニュータウンの歴史と価値を発見するために、調査・研究、アイデア、提案・デザイン、情報発信などの活動を行う。千里ニュータウンに関する各種メディア（絵葉書、パンフレット、大きな本）の制作や、まち歩きガイドツアーも実施する。

下林信夫・鈴木毅他「人と都市の媒介物のデザインに関する研究——『大きな本』を用いた実践を通して」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』、

【参考文献】

江藤道子・鈴木毅・松原茂樹他「新千里東町における建て替えに伴うマンショ

ン・コミュニティ形成に関する研究」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』、二八五一二八八頁、二〇一三年。

太田博一「豊中市千里地域の魅力」『TO YONAKAビジョン22』一八・二二

一六〇、とよなか都市創造研究所、二〇一五年三月。

太田博一監修 太田博一・田中康裕・鈴木毅編『千里ニュータウンウオーケ・ガイド——「千里ニュータウン計画」の思想を巡る』千里グッズの会／千里ニュータウン研究・情報センター、二〇一二年一〇月。

鈴木毅「千里の再構築に向けて——誰が主となるのか」『CEL』八八号、三四一三八頁、大阪ガスエネルギー・文化研究所、二〇〇九年三月。

鈴木毅・太田博一・田中康裕・松原茂樹「千里ニュータウンのための地域絵葉書の開発」『日本建築学会技術報告集』一九卷四二号、二六一—二六四頁、二〇一三年二月。

武部俊寛「新千里北町の車止めに関する研究——千里ニュータウンのミクロなデザインから生まれた地域資源」平成二八年度近畿大学大学院修士論文。

小松莉果「千里ニュータウン・新千里東町における子どもの遊び場と行動パターンに関する研究——建て替え後の実態と世代間比較」『日本建築学会学術講演梗概集（建築計画）』一三三九一五〇頁、日本住宅協会、二〇一三年五月。

念にもとづいた基本方針、取り組み方のデザインに関する研究——『大きな本』を用いた実践を通して」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』、

二〇一四年。

下渡純司・鈴木毅他「千里ニュータウン新千里東町における住環境変容と居住者の住まい方の経年変化に関する研究」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』、二〇一四年。